

近代天皇制とキリスト教

土肥昭夫、田中真人編著

（天学神学部教授・天学人文科学研究所教授）



人文書院 6,953円

第I部は「近代日本のキリスト教メディアに見る天皇制」で『基督教世界』など十数紙・誌が分析の俎上に載せられ、第II部「主要キリスト者における天皇制」では新島襄をはじめ十名の主要なキリスト者が分析の対象になっている。「このような広範な研究は、これまでなされなかつたこと」（土井）である。

第I部では、一般に理解されている、天皇制下におけるキリスト教の抑圧というイメージとは異なり、キリスト教界が明治以降、天皇制国家に積極的にすり寄り寄っていった軌跡が浮き彫りにされている。評者は戦前の国

家神道体制の下で、キリスト教が公認宗教の一つとして天皇制国家を積極的に支えていたと見る立場に立っているが、それにしてもこれほどまでとは、というのが率直な印象であった。

もつとも、分析の対象とされたメディアはいわば合法の紙・誌であり、それはある意味では当然のことであると、第II部の主要キリスト者の分析に興味をつないだ。しかし、ここでも、分析されている十人が十人ともいずれ劣らぬ熱烈な親天皇・親皇室主義者だったことに深い感慨を覚えた。戦後の「象徴天皇制」を支える根深い岩盤の一つを見せつけられた思いである。

現代のキリスト者は「王（天皇）」の問題をどのように読み解いているのであろうか。

最後に第I部で分析されたメディアの史料、貴重な史料であり、史料集としての刊行が強く期待される。

中島三千男（神奈川大学教授）